

1. 連体修飾節の構造について

これまでの通説をまず紹介して、次に新説を提出するという順序で報告を行うことに致します。

(イ) 通説の紹介

McCawley1972に先行研究の纏めがある。

(1) a. Yamada-san ga sa'ru o ka't-te i-ru. (p205)

Mr. NOM monkey ACC keep-PTCP be-PRES

“ Mr. Yamada keeps the monkey ”

b. 【 Yamada-san ga ka't-te i-ru 】 sa'ru.

c. 【 sa'ru o ka't-te i-ru 】 Yamada-san.

McCawley1972によれば、日本語の関係節は truncated sentence 台形文からなる。台形文とは、修飾される NP つまり名詞句と名詞句に接続する case marker ここでは格助詞が欠如した文のことである。(1)a の頭(こうべ)の部分を切断すると、(1)c の鍵括弧に括られた部分になる。丁度、三角錐や円錐のてっぺんの部分を切断した立体が三角錐台や円錐台であるのと似通っているので、首を切り落とした形をしているという意味で台形文と呼ぶわけである。要するに首切り落とし文ないし首切り文という意味の名称である。

Keenan1985 では日本語の関係節は prenominal external relatives 名詞句に先行する外部関係節に分類されている。

(2) John gave a check to the farmer whose cows Bill stole (p141)

(3) Every student who Mary advised passed the exam (p141)

(2)や(3)の例文に見られる下線部の箇所は NP 名詞句であるが、こうした名詞句は (the, every)といった指示詞、プラス(farmer, student)といった共通名詞、プラス修飾節(whose cows Bill stole, who Mary advised)から成り立っている。英米語では修飾節である関係節は共通の名詞を示す名詞句に後続するので、postnominal external relative 名詞句に後続する外部関係と言うことになる。共通の名詞を示す名詞句は関係節の内部には出現せずに関係節の外部に出現するので外部関係節と名付けているわけである。

こうした通説の見方に立つと、日本語の関係節には独立の文であれば存在する筈の共通の名詞を示す名詞句が欠如しているという結論に至らざるを得ない。この欠落を特に強調した見解が先に見た様に McCawley1972 であり、truncated sentence すなわち首切り文という名称にほかならない。聞き手は関係節の意味を理解する際には欠落した名詞句を挿入することになる。これがこの見方の到達点です。

(ロ) 新説の提起

本日の報告では関係節と主節とは重なり合っていると解する新説を提出いたします。

(1)b'【 Yamada-san ga ka'tte i-ru 【 sa'ru 】 ga ie-kara nige-ta 】.

c'【 sa'ru o ka'tte i-ru 【 Yamada-san 】 ni eki-mae de o-ai-si-ta 】.

(4) 【 Susannaが 飼っている 【 猫 】は 生意気だ】。

例文の(1)a/bや(4)において、前半の鍵括弧の内側が関係節であり、又後半の鍵括弧の内側が主節であると位置づけるわけです。こうすると、日本語の関係節は、名詞句の外部に位置するという見方は成立しなくなります。むしろ名詞句は関係節の内部にその要素として登場するという新しい見方が成立することになります。また日本語の関係節は台形文ではないという結論に至ります。共通の要素を示す名詞句が通常的位置から述語の右側へ移動しているという変則形の文ではあるものの、名詞句が欠落しているわけではないからです。上部を外すことが出来れば復元が可能である組立式の円錐の形に喩えたら良いのかも知れません。

(ハ) 通説の根拠を点検する

根拠の一への疑問。通説の根拠は、英米語を典型とする西洋語では、関係節は圧倒的に名詞句に後続する外部関係節であるという言語の事実求められます。これが根拠の一です。こうした典型に照らしてそれに強引に合わせて考えると、日本語の関係節もまた外部関係節であると解することが出来ます。但し、違いも残ります。英米語では関係節は典型的には名詞句に後続するのに対して、日本語の関係節は名詞句に先行するといった対照的な差異が目立ちます。とはいえ、修飾される名詞句が関係節の成分ではなく主節の成分であるという見方は日本語の関係節でも十分に成り立ちます。こうした見方に立つと、日本語の関係節は独立の文としては未成熟であり、名詞句が欠落しているという結論に到達することは避け難くなります。英米語にも変形の関係節があります。例文の(5)をご覧ください。

(5) 【 What (he says) 】 is not important】.

【 What (he says) 】という関係節の部分は、関係代名詞として関係節の成分である What が同時に名詞句相当の What として主節の成分ともなっていて、関係節の内部に共通の名詞を示す名詞句が出現する internal relatives の一変種になっています。

問題はどの種類の関係節が関係節の典型であり標準であるかという点に関わります。

英米語では圧倒的に多い名詞句に後続する外部関係節が、いかなる根拠に基づいて関係節の典型であると言えるのか。ここに問題の中心がある筈です。にもかかわらず、英米語では圧倒的に多い名詞句に後続する外部関係節が、そもそも関係節の典型や標準であるのかどうかという問題は論議すらされていません。要するに、肝心要の問題が論議の対象とされることなく、実は回避されてしまっているのです。論点の回避は余りにも明白です。

根拠の二への疑問。根拠の二は日本語の事実に関わります。日本語の動詞や形容詞にはもともと別の語形をした終止形と連体形があって、連体修飾節は終止形の接続とは異なった連体形の接続形式によって修飾される名詞句に接続していたことは明々白々たる事実で

あるからです。

(6) かわいた 花 ⇐⇐ ⇒⇒ 花の かわいた(カワキタル)

(7) 紅い 花 ⇐⇐ ⇒⇒ 花が 紅い

従って例文の(6)に見られる様に修飾される名詞を連体修飾節の内部に取り入れても、独立の文にはなりません。とすれば修飾される名詞はあくまでも主節の成分であって、連体修飾節の成分ではないという結論に至ることは避けられません。日本語の関係節にはこうした歴史的な背景が厳然として聳えていることをここで見逃すわけには参りません。古典語を材料にして分析する限り、修飾される名詞句は主節の成分であって連体修飾節の成分ではないという結論は不可避です。

とはいえ、近世語や近代語では動詞や形容詞の終止形と連体形は同形になってしまい、そこに(形容動詞の例を除けば)差異は認められません。とすれば古典語に見られた差異に基づく説明が近代語にも当てはまるのかどうかという点は即断できません。ここには未決の論点が残っているのです。

ここで、近代語における動詞や形容詞の終止形は、古典語における終止形ではなくて、古典語における連体形が変化発展した語形であると思われるという点が肝心です。この点は感情形容詞いわゆるシク形容詞の例を見れば明らかになります。近代語の形容詞の終止形は、古典語の連体形から派生したイ音便の形が、連体形だけでなく終止形としても用いられた語形であると思われるからです。

(8) aka-(k)i hana                    hana ga aka-(k)i

(9) tanosi-(k)i o-hanasi            o-hanasi ga tanosi-(k)i

従って修飾される名詞句を連体修飾節の内部に取り込みますと独立の文に限りなく接近することになります。足りないのは格関係を示す助詞(と文末成分)だけとなります。つまり古典語では連体形の活用語尾が relativizer いわゆる関係詞として機能していたわけですが、近代語ではかって連体形の活用語尾が有していたこうした機能は消失して、日本語の連体修飾節は関係節として純化された、独立の文としての完成に一步近づいたということになります。

## (二) 新説の根拠を提出する

(1)b'【 Yamada-san ga ka'tte i-ru sa'ru 】ga ie-kara nige-ta.

c'【 sa'ru o ka'tte i-ru Yamada-san 】ni eki-mae de oai-si-ta .

新説では例文の(1)b' /c' のうち鍵括弧で括った部分が関係節であると主張します。

修飾される名詞句である sa'ru や Yamada-san が関係節の成分であるとする本報告の主張が成り立つには、これらの名詞句を関係節に取り込んだ語形が文でありうることを示し、更に名詞句を述語の右側に移動することを介して倒置形が生成することを示す必要があります。

まず格助詞を接続しない無格形の例文を見て置きます。

(1)b" ??【 Yamada-san ga sa'ru o ka'tte i-ru 】.

c" ??【 Yamada-san o sa'ru o ka'tte i-ru 】.

格助詞を欠いたこうした例文は非文になりはしないでしょうか。

そこでまず無格形の事例を見て置きます(注1)。

(10) あいつバカじゃないか

尾上1987、例文(34)

(11) 私(儀)、この度、結納の儀を取り交わしました。

(12) a. しいちゃんが この人 好きなんだよ

自宅採集 ※

b. この人 しいちゃんが 好きなんだよ

c. しいちゃんが 好きなんだよ、この人

(10)(11)(12)a はどの例文も指示対象が場面や状況において明白である場合に使われています。つまり無格形は指示対象が場面や状況において明白である場合に使われる語形であるということです。しかも(12)の b/c に見られる様に、格助詞の付かない名詞句である「この人」を移動させると、誰が誰を好きなのかという人間模様を巡る事実関係に関して別の意味が発生して意味が多重になります。こうして見れば、(12)c はもともと構造的に格関係の指定が空白のままに残されている文であると解せます。多義的とも両義的とも言っている文であるわけです。

倒置形ないし変則形の事例を見て置きましょう。

(12)c の様な文型を倒置形ないし変則形の文型と呼んで置きます。変則形の文はもともと構造的に格関係の指定が空白のままに残されている文であると言えます。

(13) バカじゃないか、あいつ

(10)の倒置形

(14) よく言うよ、あいつ

(15) ちょいと出ました、三角野郎(が)

(八木節の出だし)

指示対象が場面や状況において明白である場合には格指定がなくともあるいは格指定が解除されても聞き手には簡単容易に指示対象が確定できます。こうした場面や状況において使われる語形であるわけです。日本語の述語は横書きでは左側、縦書きでは上方、時間軸の中では前方に当たる語句を支配します。(13)(14)の「あいつ」や(15)の「三角野郎」は述語より右側に位置していて、述語の支配領域の外部に出ているため、格支配を受けずに無格形のままで用いることが出来ると考えられます。

変則形を延長すると何が起きるのでしょうか。主節に登場する名詞句の指示対象を、関係節に出現する同一の名詞句の指示対象に代入するという操作を設定すると、変則形を延長することができます。この場合、関係節にあっては名詞句の指示対象は既に主節において決定されていて新ためて検索が不要であるという意味で、明白であるからです。指示対象が明白とは指示対象への到着可能性が高いということになります。

(ホ) 連体修飾節の二類型

こうして見ると、英米語において一般的である名詞句に後続する関係節ばかりでなく、

日本語において一般的である名詞句に先行する関係節もまた独立の文としての資格をほぼ備えた語形であることがはっきりします。英米語と日本語との違いは、名詞句相当語句の有無に求められるのではなくて、VO言語とOV言語との対照に求められることとなります。英米語のごときVO言語ではVつまり動詞を典型とする述語部分は後続する語句を支配します。従って、主節と、関係節という従属節とで共通の名詞を必要とする場合には、head noun 先行詞(もしくは先頭詞)の後に、関係代名詞を置いて関係節の成分とすることができます。これに対して、日本語の如きOV言語では、述語部分は先行する語句を支配することになりますので、従属節である関係節は主節の述語部分よりも前方に位置することになり、かくて主節の成分を複製することが出来ないこととなります。

(もし無理にそうすると従属節に先行詞が出現して主節にその派生体である関係代名詞が置かれることとなり、主従関係のねじれ現象が発生することは避けられない)。

その代わりに、日本語では主節と従属節とで同一の名詞句を共同利用するという方略が採用されるに至ったものと考えられます。英米語は copying strategy を採用したのに対して、日本語は sharing strategy を採用したと言えそうです。duplicating strategy と overlapping strategy の対照と言い換えても良いでしょう。

それではどちらの strategy が優れているのでしょうか。どのような優劣や差異が発生するのでしょうか。ふたつの strategy に対応して関係節の文としての完成度に違いが発生することになります。copyの方が関係節の文としての完成度は高く、その結果、関係節が直接に命題を表明することになります。関係節を次々と並列することも関係節の内部に更に関係節を設定して立体的に重層することも自在になります。こちらは精神の発達に貢献する度合いが高い形式と申せましょう。

overlap では関係節には格関係の指定が空白の成分が出現します。従って、独立の文としての完成度はやや低くなります。関係節の内部に更に関係節を設定したり、関係節を並列させたりするには限界が発生します。人間生活の日常に適した程度の複雑さの度合いを持つ言語が日本語なのです。こちらは生活の改善に貢献する度合いが高い形式と申せましょう。

## 2. 機能

日本語の関係節は internal relative の一変種なのである。それは敢えて名付ければ、名詞句を内部に包み込む関係節 overnominal internal relatives ということになる。

日本語の連体修飾節は未だ完成品には至っていない半製品に喩えることができる。それは命題を表明してはいない。話し手は、命題の真偽にコミットすることを留保したまま、限りなく命題に近い語形を提示することになるわけです。こうした発言は知識の提示とは異なる意見の開陳にとどまるものなのです。要するに日本語の連体修飾節は未成熟な語形であるということであり、知識の確認や生成は聞き手に委ねられている。手掛かりと

どうかヒントの提出である。それは聞き手にその有する認識能力を発動するように促し誘う語形である。知識の確認や生成が簡単かつ容易であることが状況や文脈において明白な事態が前提とされている。格関係が指定されていない意義はここにある(注1)。

構文の上では、述語の支配圏の外部に位置しているので、格関係は無指定ですむ。

意味の上では、格関係は聞き手の側で捜し当てるものとして、その指定は聞き手に任せである。その上で、Relevant な格関係、時には破格の関係を選択する。Relevance 理論との接点がある。Relevance 理論が説くように、真理関数に依る意味確定の操作が行われるわけであります。寺村1977が問題提起し松本1995が個々の選択要因を分析した連体修飾節について理解の候補を選択する要因は、一般化すれば、Relevance 理論の説く関連性の強い発言を行うという全般的な想定に基づいて、順次聞き手のよって処理されることになるわけです(注2)。

一口に言って、聞き手に認識能力を発動する様に働きかけ誘い促す語形である。「内の関係」と呼ばれる日本語における連体修飾節にはこうした誘発の機能が伴う。

先に述べた様に英米語は copying strategy を採用したのに対して、日本語は sharing strategy を採用したと言えそうです。duplicating strategy と overlapping strategy の対照と言い換えても良いでしょう。それではどちらの strategy が優れているのでしょうか。どのような優劣や差異が発生するのでしょうか。ふたつの戦略の利害得失をここで再確認して見たいと思います。

連体修飾節の二類型は西洋精神と日本精神の違いに対応した語形であると申せましょう。

真理の探求と和の尊重。対論と問答。全面論争と質疑応答といった対照も東西精神の基調に見られる差異に対応していることは明白です。

西洋では関係節に於いて提出された命題の真偽値をめぐる激しい討議が交わされる。真偽値を判定する受け入れられた手続きや方式があれば、真偽値は確定する。それが明白ではない領域、例えば形而上学や世界宗教の分野とか、真偽値とは異なる命題値である正誤値とか義邪値とか善悪値とか審美値を巡る争いには往々にして決着は付かない(注3)。

日本では関係節に置いて開陳された意見を手掛かりやヒントにしながら、聞き手は、自らの認識能力を発動して、既知の知識を確認したり新たな知見を確保したりする。こうした認識の共有が広く図られる。見解の相違は簡単には架橋されず、そのままに残されることが多い。既成の共通認識や信念共有の範囲では集団意思の形成は強固であるが、その範囲は限定されていて、結局、意思形成は最大公約数の集約に終わることも多い。

中右1984が明瞭に対照した英米語の yes と日本語のハイという応答詞の振る舞いの間に見られる差異も、こうした彼我の精神の基調の差異に基づき発生した現象である。英米語では肯定命題を軸として yes and no が使い分けられるが、日本語では全体命題を軸としてハイとイエが使い分けられる。英米語では命題の真偽値に関心が集中するが、日本語では話し手と聞き手の意見の異同に関心が集中する。

自然認識と人間認識を事例に、連体修飾節の二類型の有する利害得失を確認して置こう。自然法則の認識のように、人間の介在を排除した自然の世界に見られる規則性を発見するという課題に答えるには、西洋精神の方が有効である。自然法則の認識には、その真偽値を確定する確立した方法が存在しているからである(注4)。

これに対して風景の描写や人間の観察は根本的に再現であり、自覚であるから、話し手とは別に聞き手も又自力で認識に到達する日本語の方が、結局は精度の高い認識に到達できることになると言えそうである(注5)。自分で試して初めて得心がゆく。経験合理性という生活世界の合理性は言葉だけでは説明し切れるものではない。見れば分かる。やってみればわかる。という人間体験の確実性にその究極の根拠を有するからである(注6)。

西洋で有力な説明の合理性は議論や論証に用いられる合理性である。これに対して、経験の合理性は人間生活の現場において用いられる合理性である。連体修飾節の二類型は相互補完的であって相互排斥的ではない。これが本報告の到達点である。

2002.7.24 記 7.31 細部修正

#### 例文出典

出典の明記されていない例文は、筆者による作例である。

※ 2000.8.29に放映された歌謡コンサート「もう一度見たい熱唱・感動の名場面」を見ながら尾崎紀世彦が歌う場面で昭子が発した発言のメモである。p.m.8:12頃の放映場面。

#### 注

(注1) 尾上1987は主語に焦点を絞って無格形の例文を分類する先駆的かつ入念な試みであるが、「存在」「可能」「情意」の疑問文の場合には「述語の特殊性から、主語の承認と述語の承認との間に原理的に先後が」(Onoe1996, p8)ないことを実に的確に指摘している。こうした疑問文における述語は「存在の認識の形式」(尾上1987, 5頁)であるという尾上の指摘は鋭い。だが、ここで「形式」とは一体何を表す概念であるかの再吟味が不足しているとの憾は否めない。ここで尾上が「形式」と呼んでいる事柄は、聞き手の備える認識能力を指し示す概念である模様である。尾上は「ハ」が使えない理由については極めて説得力のある説明を行っているが、その反面をなす無格形が使われる条件については、何ら首尾一貫した説明を提出してはいない。格助詞の付かない名詞(句)からなる無格形の使用条件は、聞き手の認識能力の及ぶ射程内に指示対象が存在していて、聞き手は簡単容易に指示対象に到着する可能性を有していること、つまり到着可能性の度合いが高いという事実であるに違いない。「単に分離されてある」(Onoe1996, p6)といった文学的というか直感的な用語を用いた説明では、確かに鋭い洞察を含んではいるものの、いささか無力かつ心もとないと感ずるのは私ばかりでは無さそうである。

(注2) Wilson2002

(注3)ここに Habermas 理論の精華と限界があることは見やすい。Habermas は安直な真理の合意説に寄りかかることにより、判定方式が確立しているのかいないのかという肝心かつ要をなす問題から目を反らしているのである。

(注4) Descartes は『方法序説』に於いて、神への信頼と自然の光の力によって確実な認識が確保されることを明証している。神が自然に与えた法則に自然は従うのであるし、人間には自然の光という認識の能力が備わっているからである。

(注5)人間には光と闇の側面があって、自己認識や他者理解の能力ばかりでなく自己欺瞞や他者欺罔の能力も又備わっている。その結果、自己欺瞞の一変種である強い思い込みと、人格の中軸を形成する強固な信念とは連続してしまい、その間に明白かつ分명한一線を描くことは所詮できないことになるからである。

(注6)現場指示のコソアドの交替は、こうした日常世界における人間経験に基づいて成立しているわけである。この点については、蓮沼1984を参照されたい。

#### 参考文献

蓮沼 啓介 1984 「情報革命と日本語学」日本語学、4月号

Keenan, Edward. 1985. Relative clauses. In Timothy Shopen, ed., *Language typology and syntactic description*, Vol. II, 141-170. Cambridge University Press.

Matumoto, Yoshiko. 1995. Interaction of factors in construal : Japanese relative clauses. In Shibatani, M. and Thompson, Sandra A., ed., *Gramatical Constructions*. 103-124. Oxford University Press.

McCawley, James D. 1972. Japanese relative clauses. In Peranteau, Paul M. and Levi, Judith N. and Phares Gloria C. ed., *The Chicago which hunt : Papers from the Relative Clause Festival*. 205-214. Chicago Linguistic Society.

中右 実 1984. 「質疑応答の発想と論理」日本語学、4月号

尾上 圭介 1987 「主語にハもガも使えない文について」国語学会発表レジュメ。

Onoe, keisuke. 1996 「主語にハもガも使えない文について」日本認知科学会 第13回大会ワークショップ報告。http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe.html

Teramura, Hideo. 1971. The syntax of noun modification in Japanese. *Journal-news-letter of the association of teachers of Japanese*. 64-74

寺村 秀夫 1977 「連体修飾のシンタックスと意味—その2」日本語・日本文化、5号。

(『寺村秀夫論文集 I』1992。くろしお出版。所収)。209-260頁

Wilson, Deirdre. 2002. "Relevance Theory : From the Basics to the Cutting Edge" in *ICU Open Lectures on Cognitive Pragmatics*. March 26 to March 29, 2002.